

令和 6 年度第 1 回 柏市放課後子ども総合プラン運営委員会
会議録

1 開催日時

令和 6 年 9 月 3 日（火）
午前 10 時から正午まで

2 開催場所

沼南庁舎 大会議室

3 出席者

(1) 委員

土井委員長，浅野副委員長，小泉委員，木村委員，五味田委員，三好委員

(2) 事務局

依田こども部長，宮本生涯学習部長，染谷学童保育課長，原学校教育課長，他担当職員 8 名

※以下敬称略

4 資料

(1) 第 1 回 柏市放課後子ども総合プラン運営委員会会議資料

(2) 新・柏市放課後子ども総合プラン柏市行動計画

(3) 柏市放課後子ども総合プラン運営委員会設置要領

5 開会

6 こども部長あいさつ

7 これまでの振り返り

(1) 放課後子ども総合プラン（背景）

(2) 放課後児童対策パッケージについて

(3) 新・柏市放課後子ども総合プランの期間延長について
事務局より，説明を行い，質疑応答や意見聴取を行った。

（土井）

放課後児童クラブと放課後子ども教室を一体型で実施することだが，一体型というのはどういったものなのか。

（事務局）

子どもの居場所の事業として，放課後子ども教室と，こどもル

ームが別々で運営されているが、両事業で、同じ学校内で人の行き来など、行っているものを連携しながら、うまくできないかというところで、国からは示されている。校内連携型という呼び方もされている。

最近では、学校内で連携をするという意味で、連携型というものもある。柏市は小学校内にルームが必ずあるが、全国的には、ルームが別のところにある学校もある。別のところで学童をやっている、学校内で放課後子ども教室をやっているところもあるので、それをうまく連携できないかという国の考えもある。

したがって、なかには校内に放課後子ども教室とこどもルームと両方で校内連携するというのがあるが、大きく捉えるとそれが一体型というところで表現している。

8 報告事項

高柳小学校における放課後子ども教室の実施について
事務局より、説明を行い、質疑応答や意見聴取を行った。

（浅野）

1年生から6年生は全児童が対象ということで、高柳小学校はそこまで大きな学校ではないと思うが、教室には入りきるのか。人数を制限しなきゃいけないのであれば本末転倒な気がするが。

（事務局）

今現在、高柳小学校の全児童数が691名で、登録者数については150名程度を見込んでいる。ただし、実際に登録をしても登録した方全員が毎日来るわけではないので、実際に市川市で視察したところでは1日20人、多くても30人程度というところだったので、現状、やなぎっ子ルームにその人数であれば入れる想定であるということ、あとは学校にも話をして、やなぎっ子ルームの隣の音楽室があり、人数が沢山きた場合には音楽室も開放させてもらい、場合によっては、高学年は音楽室、低学年はやなぎっ子ルームと分けて使うような運営を考えている。

（土井）

他の放課後子ども教室（ステップアップ学習会）と、居場所型の違いは何か。

（事務局）

ステップアップ学習会は対象学年を絞っていて、基本的には算数のつまずきがある学年から、大体2年生3年生ぐらいから少しつまずいてくる子が出てくるので、各学校で2年生から3年生の子を中心に、放課後、週に1回程度の補充学習型という形で実施している。

一方で居場所型は、月曜日から金曜日まで放課後に実施するというので、自由に参加できるというところ、ステップアップ学習会は登録をしたら毎回来て勉強するが、居場所型は保護者と相談をして、子どもが来たいときに来るという、「子どもの放課後の新たな居場所」ということで学校の特別教室等を利用して開設をするという形である。

（五味田）

ボランティアの年齢層はどうか。また、体験型イベント、理科実験的なことも書かれているが、通常の見守りスタッフではできないと思うので、どんな人材を募集する予定か。

（事務局）

応募された方の年齢層については、もちろん現役を退いた方もいるが、3分の1ぐらいは高柳小学校に通われている子どもの保護者が応募してくれている。それ以外にも現役の方も数人いる。多いのは高柳小学校の保護者、あとは実際に定年退職して、ボランティアをしたいという65歳以上の方であったり、大学生が数名、それ以外にも広報かしわを見て、応募してくれた高柳小学校の卒業生の大学生も数名応募してきてくれているような状況。

イベントについては、実際に応募があったスタッフに、何か子ども達に教えられる特技はないかヒアリングをした。予算も限られている関係で、そういったところでうまく人材を活用しながらというところで考えている中で、実際に例えば読み聞かせが得意な方がいたり、あとは折り紙ができたりとか、そういった方が実際にシフトに入るときには、今日は折り紙ができるスタッフがいるとか、読み聞かせができる方がいるとか、告知できればと考えている。あとは卓球が得意な方もいるので、実際に体育館を使わせてもらいながら卓球をやったりとか、あとはそれ以外にもNPOと連動してやる

イベントだったり，スラックラインや，足が速くなる教室，縄跳びなど，いくつかプログラムを無料で提供してくれるなど，民間のプログラムも活用しながらやっていければと考えている。

（三好）

ボランティアを選考する中で，どういう視点で選んでいくのか。あとイベントに関して，見守りスタッフ以外の方の力があつた方がいいかなと思うので，例えば地域の市民団体など，そういった団体協力に関しても考えているのか

（事務局）

ボランティアの選び方としては，面談のなかで地域との関わりを聞いている。高柳のエリアをちゃんとわかっている方，あとは学校をわかっている方ということを重視して選んでいきたいと思っている。例えば高柳小に昔子どもが通学していた方や地域で活動をしていたり，ある程度，関係性が見える方を重視して選んでいきたいと考えている。

あとは昨今，子どもに関する悲しいニュースが起きたり，悪い意味で子供に興味があるような者もいたりするので，注意をして選んでいくよう努めている。

イベントについては，例えばスポーツ推進委員であったり，地域の市民団体で，何か子どもに対するイベントができるところを，活用していきたいと思っている。そういった団体の情報を知っていれば教えていただきたい。

（小泉）

ボランティアの面談を高柳小でやったので，面談を待っている方たちと少し話をしたが，みんな本当に意識が高く，学校のために自分の時間を使いたいと思っている方が多かった印象がある。

それからイベントのことだが地域の方たちで，いろんな特技を持った方がたくさんいる地域でもあり普段から学校に，いろいろと協力をしてくれているので，そういう方を学校から紹介することは可能。

（三好）

今後ボランティアに対し事前の研修会だったり継続にあたって説明会など研修的なことをする予定はあるか。

（事務局）

研修会は実施する予定。

（土井）

市民団体はいろいろあるが、お金を持ち出さないとできないこともあるので、予算を少しでも取りながら、たくさんの人が協力できるような準備だけは整えるように要望する。

9 協議事項

（1）放課後子ども教室の現状と課題について

（2）こどもルームの現状と課題について

（3）今後の放課後児童対策について（協議）

事務局より、説明を行い、質疑応答や意見聴取を行った。

（五味田）

居場所型というのは、とてもいい表現だなと思う。ただ、多岐にわたるということもあると思う。居場所と一言に言うと何かすごく言い心地がよいが柏市として、いろいろな情報を収集して協力体制を取っていくということがとてもよいことではないかと思っている。

（土井）

高柳小のような地区だからできるとのことだが、本当に居場所が必要なのは、或いは繋がりが必要なのは、そういう地区ではないところのほうが、子どもたちが孤立したり、保護者が孤立していると考える。そのような場に、居場所型の放課後子ども教室を設置したほうがよいように考えられる。

（木村）

学校も、地区によって、すごくカラーが違うというのもある。柏の葉など新しい新興住宅と、地元の方が多いところでは今、私たちPTAも対応が結構違うところがあるというのが今の実情である。

ステップアップ教室について、どこの学校でも定着してきていて、高柳小は今回は休止して、宿題タイムを設けるとのことだが、ステップアップ教室に通わせる保護者は、少し子どもが算数が苦手だから、宿題とは別に1時間ボランティアの方に見てもらいたいと思っている保護者もいるので、この宿題を見てもらおうということと、ステップアップとは別物と感じている。

私の学校では、ステップアップ学習会が始まる際の有償ボランティアについて、読み聞かせのボランティアをしていたメンバーが今でも活躍している。もともと学校に足を運んでいた方、学校に来慣れている地域の方に声をかけると、人材としては学校も知っていて、子どもたちも見たことがある人という安心感もあるので、そういった人材に声をかけるという方法もある。

（浅野）

一番の問題は人材の確保だと思う。何をやろうとしているとしても、ボランティアの確保ができないと何もできないと思う。高柳小は確保できているようだが、地域によっては転勤族が非常に多くて地元根づいてる人がほぼいない地域もある。特に三小は社宅が多くあるので、そういった地域だと本当に地域の人をどうやって確保していくのか。例えばPTAの委員でさえも結構苦勞してる現状がある。そういったところも1つモデルとして入れておかないと、今後展開するにあたって、どう展開していったらいいのかわからなくなるのではないかと思う。できればそういった地域を1校か2校、ステップを踏んだ方がいいと思う。

（三好）

居場所型、居場所というのは私はとてもよいと思う。子どもが主体的であったり、自分が自分らしく過ごせる場所という意味で居場所というものは、どの子どもにとっても必要である。家庭もそうだが第3の居場所というのが必要であるというところから言えば、どこにでもたくさんあればよいと思う。

ただそれが学校の実情であったり、地域性の実情ということを非常に感じたところなので、全校に同じように居場所がある必要があるのかと感じた。全校に一斉に設けなくても地域の中に第3の居場所、多様な場所があればよいと感じた。必要としないところがあるかどうかかわからないが、苦しくなるような居場所でなかったらなくてもよいと思う。

補充学習型に関してはそういった支援が必要な子がいると思うので、細くても長く続けていることが必要かどうかという問題はあと思うが、そういった機会があればよいと思う。

（土井）

今後、高柳小でのモデルを他へ広げていく方向なのか。

（事務局）

高柳小で始めるときにどれだけボランティアが集まるか確証はなかったが、学校からも声掛けをしてもらい協力してもらった結果である。必ずしもこの高柳小でのモデルがすべて当てはまるわけではないと思っており、全校に展開できるかどうかは難しいところもあるかと思う。

先ほど委員が発言していたように地域に合った居場所をふやしていきたい、というところが一番の目標で、そういったところで子どもたちの自己有用感であったり、自己肯定感を高めていくことを目的にやっている。その中で、いろんな居場所があることが大事であると考えている。形にとらわれてるわけではなく今回、高柳小のモデル事業をそのまま当てはめようというよりは、出てきた課題も含めて、それをどういう形に変えていけばいいのか、地域によっては、なかなか協力を得られない地域も出てきたときに、それがそのまま同じやり方で通用するとは思っておらず、今回のモデル事業の中で考えさせていただきたい。

（土井）

課題の中に責任の所在の曖昧さがあるが、それはどういうことか。

（事務局）

責任の所在の曖昧さについて、実際にボランティアがどこまで責任を持てるのかというところがあると思っている。職員で全て運営するということであれば、職員としての責任があるが、あくまでもボランティアという立ち位置の中で、どこまで責任を負わなければいけないのかという課題がある。

（土井）

利用者にとっての魅力、自前プログラムは限界があるという点についてはどうか。

（事務局）

利用者にとっての魅力、自前プログラムの限界という点だが、地域の力によるところがあり、高柳小のように地域でいろいろできる人材がいるところであればできるという点と、他の自治体だと委

託業者が運営をしているところもあったり，いろんなプログラムを組んで内容を充実させて運営しているところもある。そういったところと比べると，直営で運営するにあたり利用者にとっての魅力，自前プログラムの限界が少しある。

（小泉）

学校としては，学校と家庭以外の新たな居場所があるということとは，どんな形であれ，ありがたいことで子どもにとっては，もしかしたら学校や家庭ではなくて，その場所が大事な居場所になったりすることもあるので，子どもたちにとっては，どの学校にあってもそういう居場所があるということは子どもにとってすごく大事なことなんではないかと思う。

責任の所在の曖昧さの点だが，喧嘩だったりトラブルが一番心配になるところで，先生の意見としては，それが学校に来るのではないかと，ルームのトラブルも学校に来ており，放課後こども教室を始めたら，同様のことが心配される。

市川を視察に行ったときには，学校の先生方は何の問題もないというので驚いたのだが，すべてのトラブルは市が全て請負って，保護者にも連絡を取っており，全てそこで解決をし，学校は一切関わっていないと言っていた。けがをしてしまったとか，喧嘩をしてしまったとか，何かトラブルが起こると思うが，その時にどうするのかというのがなかなか難しいところだと思う。

放課後子ども教室の中でのルールづくりとか，そういったことは必要になってくると思う。保護者もそれをわきまえた上での利用ということをちゃんと考えていかなければいけないのではと思う。

（土井）

責任については，今のステップアップ学習会でも，学校から離れてる以上は生涯学習課が責任があると捉えてよいか。

（事務局）

その通りである。今のステップアップ学習会についても，放課後のことについては生涯学習課で，すべて責任を負うというような形でやっている。

（三好）

ルールづくりに関して，子どもたち自身で考える機会があって

もいいのではないか。

（浅野）

こどもルームと放課後子ども教室が一体化するという考えはないのか。

（事務局）

いくつか先進市の形を見ると一体的に取り組んでいるところもある。

それは相互関係がよかったり、学校という1つの限られたハードを上手に使っていくという面でも一定の効果が出ている自治体もあるので前向きに検討してもよいかと考えている。

（土井）

待機児童がなぜこんなに増えたのか、この増加は予想していたのか。

（事務局）

想定していなかったのは事実である。待機児童が、ここ数年は増えても40人ぐらいで推移していたという事実と、小学校の児童数は横ばい、もしくは、やや減少傾向に入ってきているなかで、コロナが終わってから、外に出て働く方が増えてたり、国の政策で女性の社会進出を強く勧めるようなところもあったりしたところで急に増えてきたと感じている。あとは、市内の北部エリアについては、開発によって急激な人口増があったところもある。

（小泉）

高柳小学校の1年生は120人のうち半分がルームに入っている。今までそんなことはなかったので、思っているよりも突然すごく増えた感じがする。

（土井）

埼玉県では児童館の中に学童保育があるところもある。学校の空きスペースとは別に、そういった連携も大事。

（小泉）

学校の敷地内で過ごせるというのはとてもいいことだと思うし、ゆくゆくはこどもルームと放課後子ども教室と、予算のこととか、いろんな部署の違いとかを越えて、1つにまとめていきながら、連携してやっていけたらいいのではないかと思う。

以上